色の概念が及ぼす影響とジェンダーレス化

3年4組10番　柏田　純奈

１．はじめに

　私はジェンダーに関する問題の中でイメージカラーについて探究した。テーマは「男女のイメージを作る色の概念が変わったら、私たちの生活にとって良い事なのか悪いことなのか。」である。

きっかけは、人権のゼミを通して社会の中にあるジェンダー問題について学んだことである。初めは、問題に対してちゃんと理解しているつもりでいた。しかし、それは私にとって知識として理解していただけであって、結局は関係のない話のように思えていたことに気づいた。なぜなら、問題に対して共感はできておらず、解決すべき問題として理解を深めることはできていなかったからである。だからこそ、今ある様々な問題を自分事として考えられないかと思ったとき、普段生活の中にある色にイメージが付くことで特定の性別の概念が生まれて固定されてしまっていることが問題視されていることをニュースを見て知り、それなら自分でも身近なジェンダー問題として捉えられると思ってこのテーマを選んだ。

２．序論

　多くの人にとって色は私たちが生まれたときから生活の中にすごく当たり前にあるものだろう。色は視覚から得られる情報源であるからだ。ここではその情報の1つであるトイレの標識を例に挙げた。身近なショッピングモールでも女性のマークには赤、男性のマークには青と、色で分けることで判断できるようにされてある。電子版日本経済新聞(原真子,2016年)によると、このようにトイレの標識が使われ始めたのは1964年の東京オリンピックの時からであった。当時はアルファベットになじみのない言葉を話す国での開催となり、誰にでもわかる表記が必要であった。そこで考えられたのがトイレの記号で使われてるようなピクトグラムだった。TOKYOオリンピック物語の著者(野地秩嘉,2011年)によると言語の壁を越えて誰にでもわかるようにするために用いられたが、トイレの標識だけは記号の形だけで表してしまうと男性がスカートを履く国もあるということで、男女で色分けをすることになった。そうして、誕生したのが今のような「男＝青、女＝赤」と色で分けられた標識である。しかし、そうやって色で分けたことで、常識として性別を色の概念で分けられるようになり、色に性別ができてしまった。では、色に性別ができてしまったことが私たちの生活の中の常識となっていることに問題はないのか。私は仮説として、常識化されたことで新たなジェンダー問題が生まれてしまい、その問題が今の社会に対し及ぼしている悪影響があるのではないかと考えた。そこで本論では、私たちの生活の中でどのようにしてこの常識が問題を引き起こしているのかを明らかにする。そのために、色の概念で性別を判断することによるメリットとデメリットを例に挙げながら検討していく。

３．本論

まず、性別を色の概念で判断することのメリットとしては、“生活の支えとしてのわかりやすさ”である。トイレの標識のように色で分けていることですぐに判断でき、間違わずに済んだり、小さな子供でも分かるようになっている。他にも、実際使われ始めた1964年の東京オリンピックの時にはこの色分けのおかげで、日本人にも他言語の外国人にも意味が伝わり、混乱することなく無事大会を終えることが出来ている。国際高校の一、二年生に対し取ったアンケートでも、「色の概念があることのメリットは？」と質問したところ、「誰もが理解できて良い」「温泉の入り口にあるのれんなどでも見かけるが、海外の観光客でも分かるようになっている」などという回答があった。このように、文字や言葉を理解できなくても誰でも判別できる常識として、私たちの生活を支えてくれている。

次に、デメリットとしては、“ジェンダーレスに配慮ができておらず、色の概念によって偏見があること”である。たとえば小学生の頃使っていたであろうランドセルから考えてみる。ランドセル工業会(一般社団法人日本鞄協会ランドセル工業会、2016年)によると、戦前までは男女共に黒色のランドセルと決まっていた。そして、私たちの記憶に新しい黒と赤のランドセルが定番化するようになったのは、ランドセルが今のような形で普及されるようになった昭和30年頃である。この頃になると、黒と赤に染色したヌメ革でランドセルを製造するようになり、「男の子が黒、女の子が赤」というスタイルが一気に広まっていった。それは1964年の東京オリンピックのピクトグラムで男女の色分けがされ始めたタイミングとほとんど同じだったこともあり、より爆発的に色の概念が広まったのではないかと考えられる。朝日新聞デジタル(長谷川陽子、2022年)によると、その影響で定番色として、根強く性別の色分けが常識化されてしまい、何十年もの間、男の子が赤を、女の子が青を選ぶことが難しいことになってしまっていた。今では、平成13年にある小売大手の販売店が24色を展開したことから、世の中のランドセル事情は変化を遂げることに成功した。その販売店によると2015年、国連サミットでSDGsが決定された17つの項目のうちの5番目の「ジェンダー平等を実現しよう」という目標より、ジェンダーレスを図るため定番色に加え、華やかなパステルカラーや深みのあるダスティーカラーが追加を実施したそうだ。実際販売してみると、世間からの評判も良かったという。その結果として、ほかの販売店でも様々な色のランドセルを販売し始めるきっかけにつながり、今のように色とりどりのランドセルが「ジェンダーレス」という見出しと共にみられるようになっている。こうして19年代の頃とは違って今では水色や黄色・紫色なども存在し、選ぶことができるようになった。だが、様々な色が普及した現在でもまだ、定番色としての色への偏見は根強く残ってしまっている。ランドセル工業会のランドセル購入に関する調査(一般社団法人日本鞄協会ランドセル工業会、2022年)によると、男児の1位はやはり黒色であり次に紺色、青色、緑色と選ぶことが多い。対して女児の1位は紫色と、少しは色への概念意識が薄くなったように思えるが、ついで2位からは桃色と赤色を選ぶ子が大多数となる結果になっている。このようにやはり今も尚、色の概念の影響で既成概念に囚われてしまっているのが現状である。アンケートでも「色の概念があることのデメリットは？」と質問したところ、「メンズ服にはピンク系の色はあまり売ってないため、やはりピンクが女性が使う色のように思ってしまう。」や「絶対に男性=青、女性=赤と決まっているわけではないけど、もしトイレの標識の色を逆にされていたら間違えてしまいそうなほど性別の判断材料として、イメージがついてしまってる」などと回答があった。このアンケートから、色の概念が常識になってしまっている大人と一緒に選ぶことで選ぶ物に影響を与えてしまっている可能性もあるかもしれないと考えたが、たいていは自分の意思でランドセルを選んでいるはずの小さい子までにもどうしてこんなに色の概念があるのか。私はこの疑

問を新たな問いとして立て、周りの環境からの影響が色の固定概念化に繋がってるのではないかと考えた。

４．結論

探究をしていく中で、思い返せば自分にも幼い頃から色に性別のイメージがあったことに気づいた。通っていた幼稚園では、園内での制服の色が男の子は青、女の子はピンクと分けられていた。当時の私にとっては男の子は青で女の子がピンクの色だということを常識として理解し、それが当たり前のことだと思っていた。だからこそ、青色の物を選ぶ女の子のことを、好きな色が選べていると思うのではなく、男の子っぽい子だと思ったりしていたことを思い出した。

このことを踏まえて、新たな問いが生まれた。それは今の時代に相応しく色の概念に囚われず生活ができるようになるためにはどうすればいいのか。この問いを解決するためには、色の概念が固定化していかないように生活の中にある性別を判断できるために使われている色をどう変えていくかが問題となる。

普段私たちは生活の中で当たり前に色が情報を示してくれているからこそ、生活しやすくなっているのは確かである。そんな生活の支えを変えてしまえば、もしかしたら生活に支障が現れるかもしれない。なので私は、これからの更なる探求として性別に囚われず自分らしい色を選びやすくなり、より良い生活ができるような色の概念の変え方を見つけられるようにしたいと思う。

５．おわりに

数あるジェンダー問題を知識としてではなく、自分事として捉えて理解するために探究を始めたが、まだまだ自分でも意識してないうちに知識としても理解出来ていなかったことが分かった。そのため、今ある色の概念を変えることが、無意識の内の固定概念を変えなければならないことに繋がるのでは無いかと考えた。そのため、自分自身としてまずは性別を気にせず色を選び、自分の好きな色を、自分らしく生活していこうと思う。そして誰もがジェンダー問題を少しでも自分事として捉えられるように、理解の和が広まるようにするために、この学びを生かし、色の概念で生活しないようにしていくことを目標としていこうと思った。

６．参考文献・出典

原真子 “始まりは64年TOKYO　言語を超えたピクトグラム” 日経電子版 https://style.nikkei.com/article/DGXMZO08253700S6A011C1UP2000/ (2022年10月14日)

野地秩嘉著(2011年)『TOKYOオリンピック物語』小学館

長谷川陽子 “ランドセルから考える、色とジェンダー ピンクは、黒は、誰の色？” 朝日新聞デジタル https://www.asahi.com/articles/ASQ5L7QKHQ5BUCVL009.html (2022年9月30日)

一般社団法人日本鞄協会ランドセル工業会　“ランドセル購入に関する調査”　ランドセルくらぶ https://www.randoseru.gr.jp/graph/（2022年10月14日）

一般社団法人日本鞄協会ランドセル工業会　“ランドセルの歴史”　ランドセルくらぶhttps://www.randoseru.gr.jp/history/rekishi.html（2022年10月14日）